

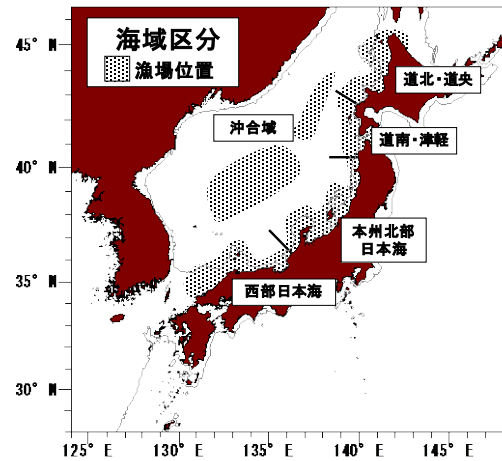


平成28年度 第2回 日本海スルメイカ長期漁況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
日本海区水産研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(平成28年8月～12月)のポイント

- ・今期の全体の来遊量は前年および近年平均を下回る。
- ・道北・道央の漁期前半では前年並で、近年平均を下回る。
- ・道南・津軽では前年を上回り、近年平均を下回る。
- ・その他の海域では前年および近年平均を下回る。
- ・本州北部日本海および西部日本海では近年同様、好漁場が形成されにくい。
- ・沖合域では、道北沖で8月～11月、大和堆周辺海域で11月～12月に漁場が形成される。



* 近年は最近5年間(平成23年～平成27年)

問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 日本海区水産研究所

担当：業務推進部 加藤、江連

資源管理部 上原、久保田

電話：025-228-0451、ファックス：025-224-0850

当資料のホームページ掲載先URL

<http://abchan.fra.go.jp/>

平成28年度 第2回 日本海スルメイカ長期漁況予報

今後の見通し（2016年8月～12月）

対象魚種：スルメイカ

対象海域：日本海（道北・道央、道南・津軽、本州北部日本海、西部日本海、沖合域）

対象漁業：主にいか釣り・小型いか釣り漁業

対象魚群：秋季発生系群、後半は冬季発生系群も含む

1. 道北・道央（小型いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：漁期前半は前年並で近年平均を下回る。漁期後半は現時点では予測が困難である。

(2) 漁期・漁場：8月までと11月～12月に来遊のピークがある。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：前年を上回り、近年平均を下回る。

(2) 漁期・漁場：8月までと11月～12月に来遊のピークがある。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：前年および近年平均を下回る。

(2) 漁期・漁場：近年同様、好漁場が形成されにくい。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：前年および近年平均を下回る。

(2) 漁期・漁場：近年同様、好漁場が形成されにくい。

5. 沖合域（いか釣り）

(1) 来遊量・漁況：前年および近年平均を下回る。

(2) 漁期・漁場：道北沖で8月～11月、大和堆周辺海域で11月～12月に漁場が形成される。

* 道北・道央（宗谷～後志）、道南・津軽（渡島、檜山、青森県）、本州北部日本海（秋田県～石川県）、西部日本海（福井県～長崎県）、沖合域（日本海中央部）。

* 近年平均は最近5年間（2011年～2015年）の平均、前年は2015年を示す。

I 予報の説明

2016年6月までの日本海沿岸各地の漁況の経過、6月下旬～7月上旬に実施した日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果、冬季発生系群を主体とした太平洋側への来遊状況（平成28年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報）、および漁期前半（9月まで）の海況予報（平成28年度 第2回 日本海海況予報）を情報として、今期の漁況を予測した。

1. 道北・道央（小型いか釣り）

本海域では、近年、7月～8月と11月～12月に漁獲量のピークがある。前半は秋季発生系群が主対象であり、後半は道東・オホーツク海から宗谷海峡を經由して来遊する冬季発生系群が主な漁獲対象となる。

【情報と予報の説明】

日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果では、本海域の分布量は前年並で、近年平均よりも少なく、本年6月の本海域の漁獲量は前年および近年平均を下回った。ただし、6月の道南・津軽の漁獲量が前年を上回っており、その後北上し本海域に来遊する可能性がある。以上のことから、今期前半の漁況は前年並で、近年平均を下回ると予測される。また、今期後半には冬季発生系群が漁獲の対象となるが、来遊量に関しては、現時点では予測の根拠となる情報が不足している。

2. 道南・津軽（小型いか釣り）

本海域では、近年、6月～8月に漁期のピークがある。さらに、太平洋側から津軽海峡を經由して来遊する冬季発生系群を対象に11月～12月にもう一つ漁期のピークが出来る場合がある。

【情報と予報の説明】

日本海スルメイカ漁場一斉調査結果では、本海域の分布量は前年を上回ったが、近年平均を下回った。一方、本海域における6月～8月の漁獲量は減少傾向にあったが、本年は6月の漁獲量は前年および近年平均を上回った。一方、今期後半の太平洋から当海域への来遊量に関しては、道東太平洋海域における冬季発生系群の来遊量が前年を下回るものの、道南太平洋～常磐海域では前年並と予測されている。以上のことから、今期の漁況は前年を上回り、近年平均を下回ると予測される。

3. 本州北部日本海（小型いか釣り）

本海域では、近年、5月～7月が漁期の中心であり、8月以降に好漁場が形成される状況にない。

【情報と予報の説明】

日本海スルメイカ漁場一斉調査による本海域の分布量および本年5月～6月の本海域の漁獲量は前年および近年平均を下回った。さらに、今期前半の表面および深度50m水温は「やや高め」と予測されているため、近年同様、好漁場が形成される状況にないと予測される。

4. 西部日本海（小型いか釣り）

本海域では、5月～6月に沿岸域を北上する群の他、10月以降に沖合から南下する群が漁獲の主対象となる。ただし、近年は秋季発生系群の南下群が漁獲対象となる10月～12月に漁獲が伸びない傾向がある。

【情報と予報の説明】

本海域における5月～6月の漁獲量は、前年および近年平均を下回った。日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果によれば、スルメイカ秋季発生系群の資源量指数は前年および近年平均を下回ったことから、近年同様、本海域では好漁場が形成される状況にないと予測される。

5. 沖合域（いか釣り）

沖合域では従来、7月～12月にかけて大和堆周辺海域に、水温の高い8月下旬～9月には道北沖にも漁場が形成されてきた。しかし、近年は漁場が北偏化するとともに漁期が遅れ、8月～11月は主に道北沖に漁場が形成され、大和堆周辺海域では11月～12月のみに漁場が形成される年が多くなっている。

【情報および調査結果】

日本海スルメイカ漁場一斉調査の結果によれば、スルメイカ秋季発生系群の資源量指数は前年および近年平均を下回ったことから、本海域への来遊も前年および近年平均を下回ると予測される。漁期・漁場については、今期前半の水温が「やや高め」と予測されているため、近年同様、道北沖で8～11月、大和堆周辺海域で11月～12月に漁場が形成されると予測される。

Ⅱ 予報に用いた主要な情報および調査結果

1. 日本海スルメイカ漁場一斉調査結果

日本海におけるスルメイカ秋季発生系群の分布状況を、イカ釣りによる試験操業（6月下旬～7月上旬に実施）によって調べた（図1）。

1) 分布状況

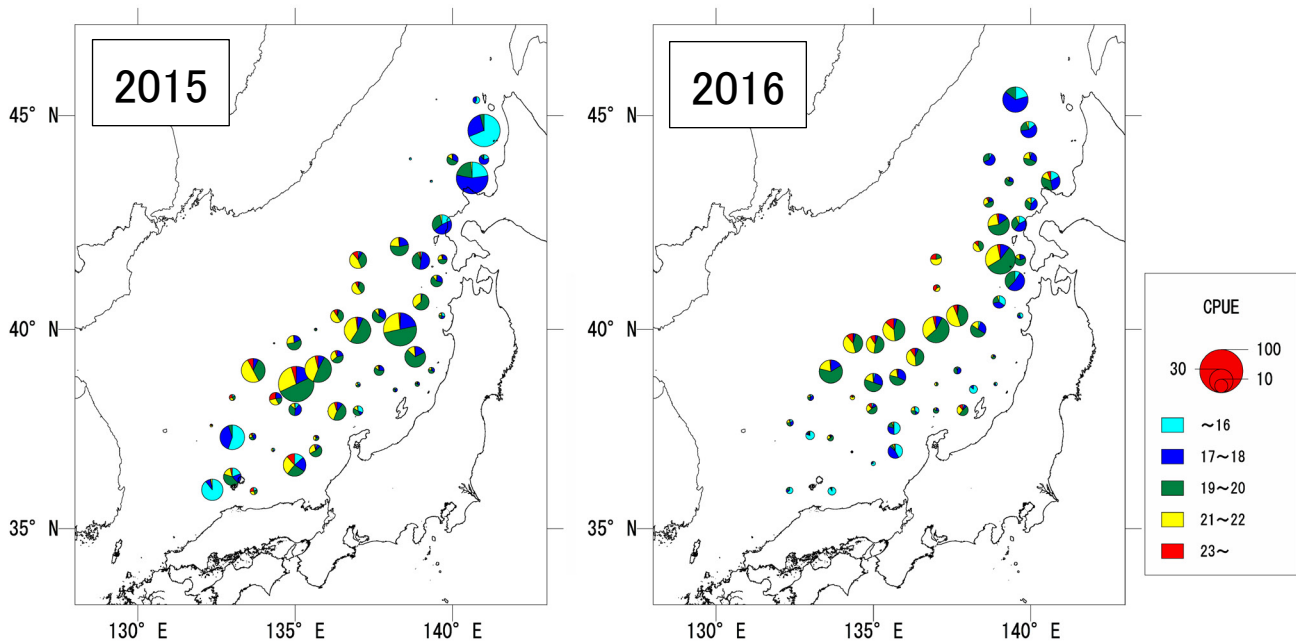


図1 日本海におけるスルメイカの分布状況（2015年と2016年の調査結果）

図中●の面積は各調査点の分布密度の指標となるCPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）を示し、各色は各外套背長範囲(cm台)の比率を示す

- (1) 道北・道央海域では、外套背長17cm台～18cm台および19cm台～20cm台の個体を中心に採集された。分布密度の指標となるCPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）は35尾が最大で、50尾を越える調査点はなかった。
- (2) 道南・津軽海域では外套背長19cm台～20cm台中心で、沖側では21cm台～22cm台、沿岸側では17cm台～18cm台もそれぞれ多く、沖合側の方がより大型の個体が採集された。CPUEは47尾が最大で、50尾を越える調査点はなかった。
- (3) 本州北部日本海および西部日本海では、外套背長16cm台以下の小型個体を中心に採集された。CPUEはいずれの調査点でも20尾未満であった。
- (4) 沖合域では、外套背長19cm台～20cm台および21cm台～22cm台が中心で、他の海域よりも大型であった。例年通り、大和堆周辺海域におけるCPUEは他の海域より比較的高かったが、CPUEが50尾以上の分布密度が高い調査点はなく、最大でも38尾であった。

2) 資源量指数

日本海スルメイカ漁場一斉調査の全調査点の平均CPUE（釣機1台1時間あたりの採集尾数）をスルメイカ秋季発生系群の資源量指数とし、これを日本海への来遊量の目安とした。資源量指数は、1970年代後半は15尾前後であったものの、1980年代には低下し、1986年は2.76尾となった（図2）。その後、資源量指数は増加傾向に転じ、2000年～2002年には3年連続して20尾を越えた。しかし、2003年以降は概ね15尾前後で推移しており、20尾を越えたのは2008年（21.06尾）および2014年（28.80尾）のみとなった。2016年の資源量指数は、11.12尾であり、前年（14.56）を下回り、近年平均（18.28）の約60%であった。

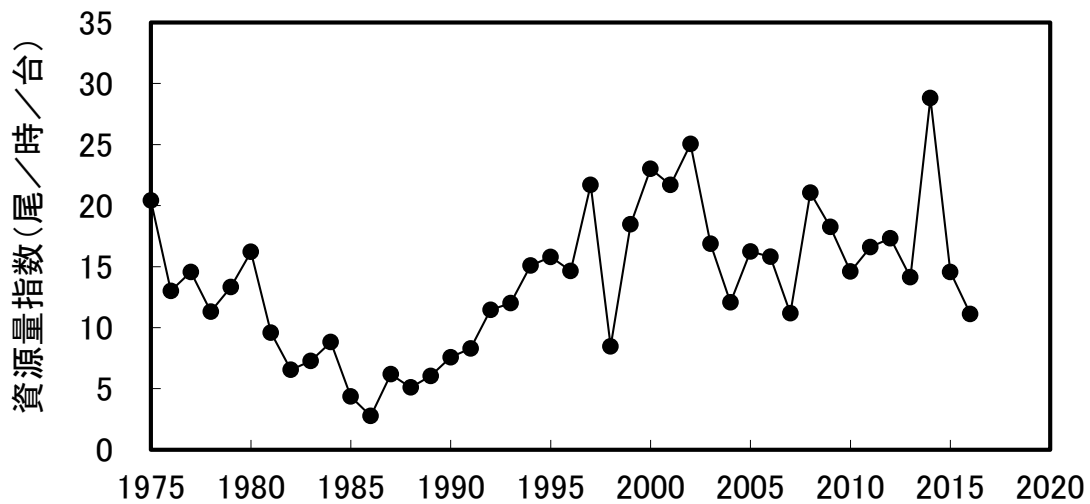


図2 日本海におけるスルメイカ（秋季発生系群）の資源量指数の変化

3) 魚体の大きさ

資源量指数で重み付けした外套背長組成を図3に示す。2016年は19cm台にモードがある組成であった。外套背長18cm台より小さい個体は前年および近年平均より少なかった。外套背長20cm台～21cm台の個体も前年および近年平均より少なかったが、22cm台以上の個体は前年と同程度であった。

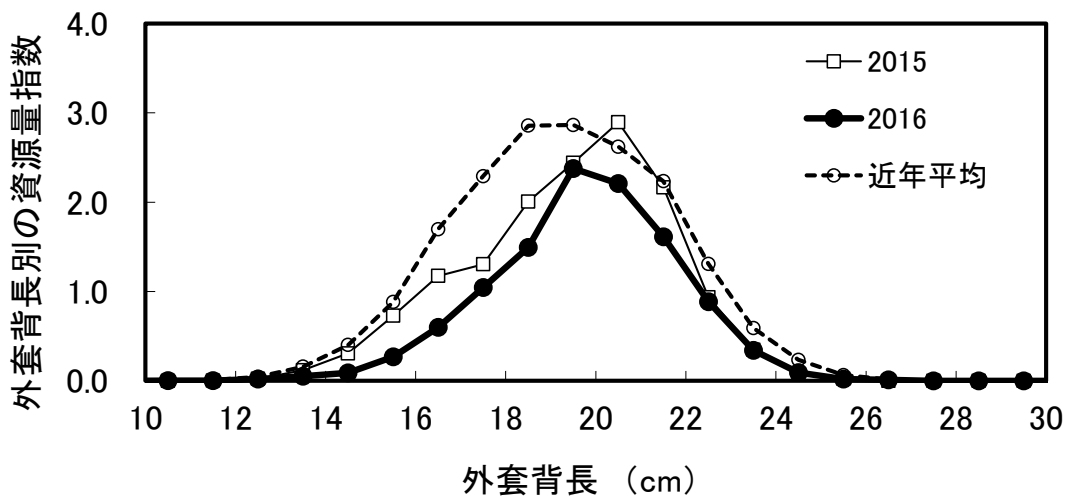


図3 日本海スルメイカ漁場一斉調査結果によるCPUE重み付け平均外套背長組成
各外套背長階級の値は釣機1台1時間あたりの平均採集尾数を示す

2. 2016年6月までの日本海各海域の漁況の経過

2016年6月までの各海域の月別漁獲量を図4に示す。2016年の漁獲量（4海域合計）を月別に見ると、1月～2月および4月～5月に前年および近年平均を下回り、3月に前年および近年平均並、6月に前年並で近年平均を下回った。6月には道南・津軽で前年および近年平均を上回ったが、その他の海域で前年および近年平均並～下回る漁況であった。

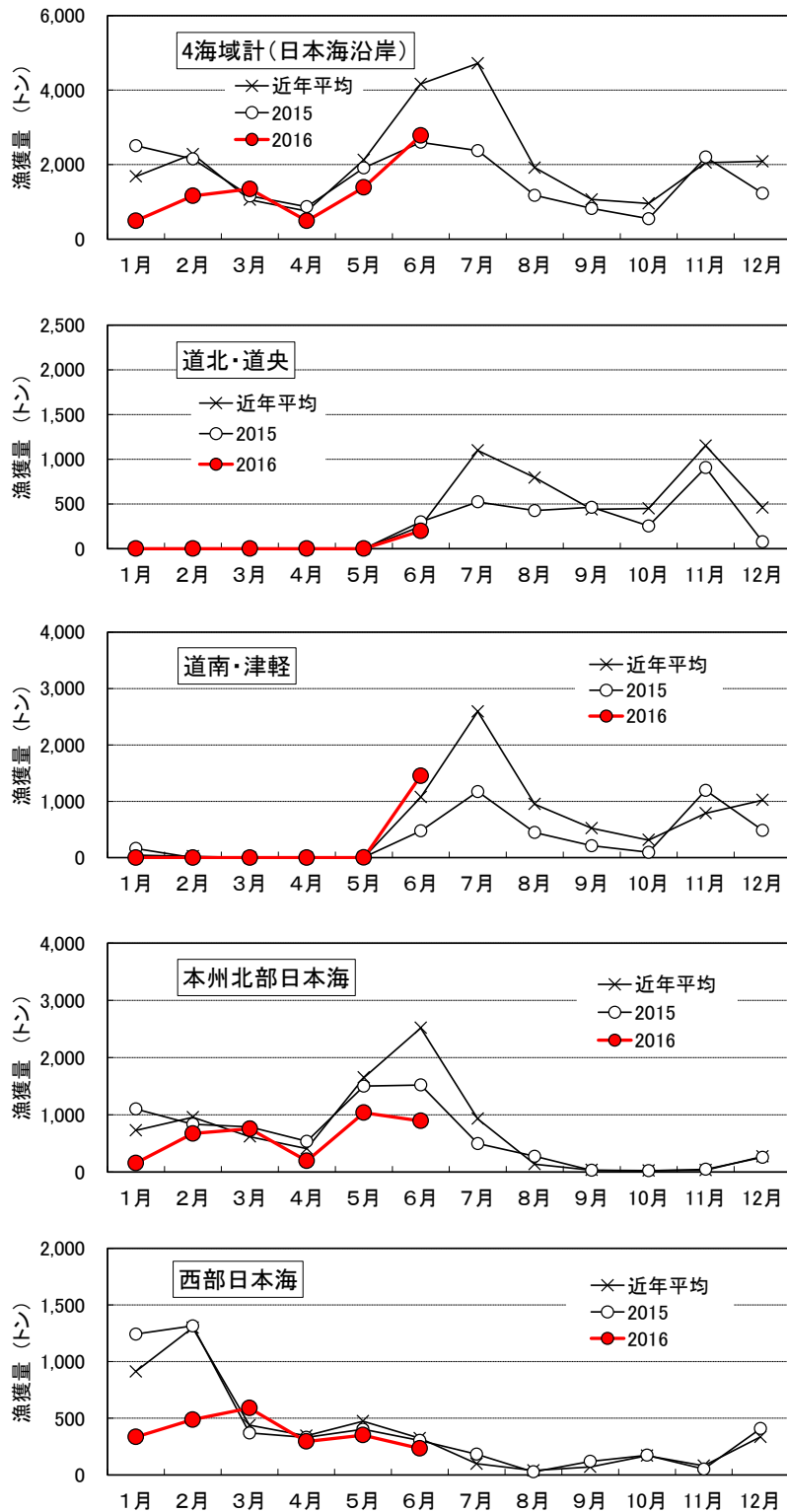


図4 日本海各海域の生鮮スルメイカの漁獲量 (トン)
各道府県試験研究機関および漁業情報サービスセンターの資料より作成 (一部未集計)

3. 太平洋側 (冬季発生系群) の資源状況

太平洋側には主にスルメイカ冬季発生系群が分布する。これらは10月以降、宗谷海峡および津軽海峡を經由して日本海に来遊するため、太平洋側の冬季発生系群の資源状況は10月以降の日本海の漁況に深く関係する。

平成28年度 第1回 太平洋スルメイカ長期漁況予報によると、8月～9月の太平洋側への来遊状況は、常磐～道南太平洋海域では前年並、道東太平洋海域で前年を下回ると予測されている。

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 中央水産試験場 函館水産試験場	京都府農林水産技術センター 海洋センター
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	兵庫県立農林水産技術総合センター 但馬水産技術センター
秋田県水産振興センター	鳥取県水産試験場
山形県水産試験場	島根県水産技術センター
新潟県水産海洋研究所	山口県水産研究センター
富山県農林水産総合技術センター 水産研究所	長崎県総合水産試験場
石川県水産総合センター	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
福井県水産試験場	国立研究開発法人 水産研究・教育機構 北海道区水産研究所
	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 日本海区水産研究所